

「森銑三刈谷の会」だより 45(2025/9/20)

発行 2025/9/20 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

45:2025/7/19(土) 神谷磨利子「森銑三・森三郎往復書簡(昭和43年10月)」を読む」参加15人

(神谷 磨利子)

昭和43(1968)年10月27日消印の森銑三から森三郎へのはがきが見つかり、内容から、以前に読んでいた10月23日消印の三郎から銑三に宛てた書簡への返信であることが分かった。三郎の書簡の内容は、銑三から送られた著書『近世人物夜話』(同年9月30日、東京美術発行)の読後感を認めたものである。

『近世人物夜話』には、人物を主題とする短文42編の旧稿と論考「人物研究に就いての私見」とが収められている。各人物の逸話については種本が明記されている。三郎が書簡中に「他を圧して面白かった」として挙げた「新門辰五郎」(銑三の注書きには『新門の』と『の』の字を入れて読んで貰いたい」とある)を皆で読んだ。エピソードや表現は種本として挙げている大内青巒の文章によるが、銑三自身の考えが出ている表現が二か所あった。一点目は、体調が悪く慶喜の依頼を断ろうとしている辰五郎に、最後のご奉公をするように勧めた後、夫の身を護ろうとするかのように自害した妻の態度についてである。二点目は、幼少期からの浅草の観音様への信仰を最期まで貫いた辰五郎の生き方を「詩趣に充ちたもの」と表現した個所である。銑三は「人物研究に就いての私見」に、伝記にはしっかりとした種本を明記することが重要だと言い、その人物が浮かび出て、その人の精神に触れることこそが目的であると述べている。「新門辰五郎」は銑三の伝記についての考え方をよく表わしている。

銑三のはがきには、東京美術がもう一冊出したい意向を持っていると書かれている。『近世人物夜話』の翌年(昭和44年)、『明治人物夜話』が刊行された。

森と大内の「新門辰五郎」

鈴木 哲

森三郎あて森銑三(1968/10/27)のはがきは郵便番号導入(1968/07/01)直後で「あなたの住所にも郵便番号を」という標語が目を書く。刈谷市は448、藤沢市は251の3桁番号で、当時はがきは7円だった。

森「新門辰五郎」『近世人物夜話』は出典に大内青巒「新門辰五郎」『新公論』(1910/2,3)を挙げる。国立国会図書館デジタルコレクションで大内「新門辰五郎」(ルビはしんもんたつごろう)「其一」「其二」「完結」『新公論』(1910/2,3,4)を読むことができる。

森三郎と森銑三の往復書簡に寄せて

飯田 芳子

『近世人物夜話』を贈られた三郎の印象的な言葉に「兄さんの畑」がある。それまで読んできた作品が一冊に纏められていることを歓迎し、作品の評を試みている。伝記の評というよりも多分に好きな作品を挙げている感が否めない。同書所収の「坂田藤十郎」は元禄期に活躍した役者である。俳号を持っていることから教養ある「やつし」として客の耳目を集めたであろうことは間違いあるまい。三郎は書簡の中で「時代が古すぎて・・・ピンと来るものが薄かった」と書いている。三郎にとって役者は存在感が大切なのかもしれぬ。

「人物研究についての私見」の中で「屋下に屋を架す」について柴田宵曲は「屋上屋を架す」と書かれていたと反論を試みるが、銑三からの答えは明快である。

最後に「新門辰五郎」、この時代を支えた人々との交流も描かれ意気(粋)で生きる男の言葉の意味、背景を丁寧に描き切って好感を覚える。銑三の言うところの詩趣であろうか。

書簡から伝わる兄弟の仲の良さ

河橋 育実

明治生まれの森兄弟ですが昭和43年の書簡と思うとついこの間の事に感じますが、それでも半世紀以上上っているんですね。

三郎さんの手紙からは銑三さんを尊敬している感じが伝わりますし、銑三さんからの手紙は伯父姪の信頼関係も感じられます。近況報告だったり作品の感想だったりで仲の良いご兄弟だったのでしょね。

優しい気持ちにさせてもらった会でした。

(神谷注)『近世人物夜話』所収の伝記各編は『森銑三著作集』正編第1巻、続編第1-3巻で読むことができる。「新門辰五郎」続編3巻 pp.120-129、「坂田藤十郎」続編3巻 pp.7-11にある。

2025/9~11の予定

46:2025/9/20(土) 第1会議室:鈴木哲「永井荷風「断腸亭日乗」で読む森銑三「偏奇館の或日」」

47:2025/10/18(土) 2階展示コーナー、視聴覚室:村瀬典章氏解説「刈谷図書館創立110周年記念 刈谷図書館と村上文庫展」

48:2025/11/15(土) 第1会議室:神谷磨利子 森銑三(1934年)「黄表紙作家としての唐来三和」~『再会親子銭独楽』(寛政5年、出版つたや)を読もう

* 12月は休会